

名古屋 文化情報

2015
1・2
January / February

No. 360
NAGOYA
Cultural
Information

随想／古池 鱗林（タレント・講師） 視点／アートで生まれ変わる 中川運河再生への取り組み
この人と／栗木 英章（劇作家・俳優・劇団名芸代表）



2015

1・2

January / February

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品	2
随想 芸どころ名古屋 名古屋はどえりゃ〜おもしろい! 古池 鱗林(タレント・講師)	3
視点 アートで生まれ変わる 中川運河再生への取り組み	4
この人と… 栗木 英章(劇作家・俳優・劇団名芸代表)	6
おしらせ	10

表紙

作品

「答賈長湫詩」

(2013年 / 210×62 cm)

中国宋代の米芾(1051~1107年)の書風を基盤とし、単体で沈着・冷静に流れをつくり、行間・字間に気を配りながら中央に精魂をこめ全体を盛り上げるように作成した。

関根 玉振 (せきね ぎょくしん)

1949年 豊田市生まれ
1992年 奈良教育大学大学院教育学研究科 修了
2005年 愛知県立大学非常勤講師
2009年 愛知県芸術文化選奨文化賞受賞
2013年 第45回日展特選受賞

「なごや文化情報」編集委員

倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
田中由紀子 (美術批評/ライター)
はせひろいち (劇作家・演出家)
米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

「2013年 名古屋市民文芸祭」
(第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市会議長賞◆

名古屋市長 西本 光貴

西本 光貴

トイレットペーパーの一生

トイレットペーパー。

カラカラと使うただだされ。

ブリッとちぎられる。

そして使われ。

そしてポイと捨てられ。

ジャーと流される。

流されたら、はい水こうをとおって。

汚ない下水道をザーザーと流れ。

そして下水場に流されます。

それでトイレットペーパー

の一生は終わります。

随想

芸どころ名古屋 名古屋はどえりゃ～おもしろい!



こ いけ りん りん
古池 麟林(タレント・講師)

地元を中心に講師、ラジオパーソナリティ、司会等幅広く活動中
名古屋の芸人で結成された海演隊(東海地区に演芸を広め隊)所属

「芸どころ名古屋」という言葉、いつの頃からか知っておりました。

特に意味を深く考えるわけでもなく「ここは芸どころ名古屋ですから」と普通に口にしていたような…。しかしここ数年、名古屋の芸能の歴史、種類、おもしろさにどっぷりとつかる機会が多く「やっぱりここは芸どころ名古屋だがね!」そんな意識に変わりました。

昨年からはじまった「やっとかめ文化祭」。歴史まち歩きや芸どころまちなか披露、まちなか寺子屋等々、名古屋の文化・芸能を、なんと、ただ!もとい無料!!で体験(中には有料イベントもございますよ)できるプログラムが盛りだくさん!

しかもほぼ一か月間開催「イベントをチェックして、たくさん参加せにゃ損ですぞね～～!」と方々でお話させていただきました。様々な人が「狂言初めてみたよ～、おもしろい!」「講談初めて聞きました。今度どこでやられるんですか?」などなど、皆様からの反響も嬉しゅうございました。

古典芸能に携わる私もですが、まだまだ名古屋の芸能について知らないことばかりで、色々勉強になりました。和泉流狂言発祥の地、尾張漫才は

現在の漫才のルーツ、名古屋生まれの都々逸等々「名古屋ってすごいがね!」と改めて思ったものです。その上、司会やら講談で登場させていただいた私には、もう一つ大きな特典が!名古屋を中心に芸能に携わる皆様とのご縁をたくさん頂戴した、ということです。(狭い町なのに、意外と交流がなかったのが現実です)

このご縁を活かしまして、今後名古屋芸のコラボレーションができるのではないかと、楽しみでなりません。

名古屋といったら?と他県の人に尋ねると「名古屋めし」がトップバッター。しかし、「芸どころ名古屋」という発想が出るぐらい盛り上がる事を願って…。あつ!そのためには、中京地区唯一の定席寄席であった「大須演芸場」も閉鎖している場合ではないですね!大須演芸場の早期復活も願わねばなりません!!!

芸どころ名古屋はまだまだおもしろくなっていくはず。

色々あーだこーだとゆうてまいりましたが、そろそろお時間一杯。この続きはまたお会いした時にも ベンベンツ!

アートで生まれ変わる 中川運河再生への取り組み

名古屋港と名古屋市都心部を南北につなぐ中川運河。水運による物流の軸として地域の経済発展を担うという役目を終えて、市民から忘れ去られようとしている中川運河を現代アートの力で再生させようとする試みが、名古屋まちづくり公社名古屋都市センターの「中川運河助成 ARToC10」により展開中だ。そんな運河再生の取り組みについてレポートする。(まとめ：田中由紀子)

東洋一の運河、中川運河の歴史

名古屋市民でも、中川運河を知らない人は少なくない。現在はほとんど水運物流に使われていないが、いまま周辺は工場や倉庫が立ち並び、整備された公園や親水スポット以外は水面に近づけない場所もあるため、馴染みがないのだろう。

中川運河とは、名古屋港から名古屋駅南のささしまライブ24地区へと伸びる全長 8.2km（支線含む）の運河。工業都市としての発展を視野に入れた名古屋市が開削し、昭和7年に全線が開通した。名古屋港と旧国鉄笹島貨物駅が水路でつながり、掘削時に削り出された土で敷地造成された両岸には、工場や倉庫が誘致された。完成当時は「東洋一の運河」と呼ばれ、昭和39年には通航船舶隻数約75000隻、取扱貨物量400万 t 以上と、名古屋市の経済発展に大きく貢献したが、昭和40年以降は幹線道路が整備され、船からトラックへと輸送手段が移行した。現在は、通航船舶隻数が最盛期の 1.9%、取扱貨物量は 1.2%にまで減少。貨物輸送の水路としての役割をほぼ終え、市民からも忘れられようとしていた。



高層ビルを背景に倉庫群が立ち並び中川運河

中川運河の再生構想の策定

近年では、ボート競技の練習やドラゴンボートなどの水上レクリエーション、アートイベントでの活用をとおして、市民に開かれた場所にしていこうという機運が高まりつつあった中川運河の再生構想として、平成24年に名古屋市と名古屋港管理組合が策定したのが「中川運河再生計画」である。これは、土地利用の現状や開発動向を踏まえて、運河北部を「にぎわいゾーン」、中央部を「モノづくり産業ゾーン」、南部を「レクリエーションゾーン」にゾーンニング。「にぎわいゾーン」は「港と文化を感じる都心のオアシス」、「モノづくり産業ゾーン」は「モノづくりを支えるキャナルストリート」、「レクリエーションゾーン」は「水と緑のレクリエーションフィールド」と、それぞれの特性に合わせた開発イメ

ージを想定し、ゾーンごとの取り組み内容を具体化したものだ。

アートで再生、そして挑戦、創造へ

この「中川運河再生計画」に賛同したリンナイ株式会社（本社／愛知県名古屋市中央区福住町 2-26）からの寄附を活用し、「にぎわいゾーン」で行われる現代アートの展示やワークショップを対象に、平成25年度より名古屋都市センターが行っている助成事業が「中川運河助成 ARToC10」（以下、ARToC10）だ。

同センターは、これまで調査・研究部門で中川運河を調査対象に研究を続け、運河で行われるアートイベントをサポートしており、こうした経緯から寄附を受けて活用することになった。

ARToC10 は、「中川運河再生文化芸術活動助成事業」の愛称。Art(アート)、Re-(再生)、Try(挑戦)、of、Creation(創造)の頭文字に、実施期間10年の10を付け、「あーとつくてん」と読む。アートで運河を再生し、そこから挑戦や創造を生み出そうという思いが込められている。

同センターがこれまで継続して行ってきた「まちづくり活動助成」は、助成対象を現代アートに限ってはいなかったが、ARToC10 の助成対象を「にぎわいゾーン」の魅力向上につながる現代アートに限定したのは、リンナイ株式会社が運河北部の倉庫群を利用したアートイベント「中川運河チャンネルアート」の開催を好意的に捉えていたことによるところが大きい。また、運河の歴史や文化・芸術を楽しむ市民活動の継続的な実施を通じ、都心から人を呼び込もうとする「にぎわいゾーン」の再生イメージから、現代アートにより「にぎわいゾーン」の活性化を目指す活動が助成対象となった。

通常は芸術性の高さが助成の選考基準になる場合が多いが、ARToC10 では芸術性の高さとともに、中川運河でなければ成り立たないアートや、運河を舞台とすることで、運河の魅力を引き出すと同時にそれ自体がより際立つアートを助成対象の評価の視点にしているのが特徴だ。2年目となる今年、「中川運河 映像アーカイブプロジェクト」「中川運河リミコライン・アートプロジェクト」「Nature/Landscape/Human」の3本のプログラムが助成を受け、9月中旬から27年1月にわたり、中川運河の小栗橋から長良橋を中心としたエリアで展開されている。



夜景に移ろう運河の記憶

昨年度に続き2回目となる「中川運河 映像アーカイブプロジェクト」は、9月18～21日の19:00～21:00に行われ、2700人の来場者を動員した。《waltz 2014》は6隻の筏にそれぞれ縦4m 横2mの巨大スクリーンをのせ、長良橋北側の水面に浮かべた映像インスタレーションで、高層ビルが立ち並ぶ名古屋駅の夜景を背景に幻想的な風景をつくり出した。スクリーンに映し出された中川運河にゆかりのある人々や周辺の風景が、運河の水面にも美しく映り込むこの作品は、流れのない運河の特性を巧みに利用した作品といえるだろう。

初日は機材トラブルでスクリーンに投影できなかったものの、「投影されないが大丈夫なのか」と心配する周辺住民からの問い合わせもあり、地域の期待も垣間見えたという。



都心のビル群の夜景とコラボレーションする《waltz 2014》

参加者と共に運河の魅力を発見

「中川運河リミコライン・アートプロジェクト」は、アートをとおして運河の魅力を発見したり、運河に関わる人々のさまざまな思いを視覚化していこうとするプロジェクト。運河をテーマにした作品展示やワークショップなどのアートプログラムのほか、中川運河リサーチプログラム・フィールドワークショップとして運河周辺のまちあるきを行ったり、アーティストや専門家を招いたトークイベントを開催したりして、参加者と共に中川運河を考えていこうとするプロジェクトだ。

拠点となったのは、松重閘門から近い河岸にある事務所2階に開設された中川運河アート&リサーチラボ。9月13日～11月29日のプロジェクト期間限定の使用だったが、ここでの取り組みは地域の方にも浸透しつつあったようだ。



「中川運河フィールドワークショップ～水辺のステキを見つけよう!!」の様子



加藤マンヤ(その水は、どこから来て、どこへ行くのか?)展示風景

中川運河の歴史といまを体感

「中川運河チャンネルアート」は、運河の有効活用を考える上でその存在や可能性を市民に知ってもらうことを目的に、市民団体により始められたアートイベントだ。平成22年から行われ、5回目となる今回のテーマは「Nature/Landscape/Human」。11月15・16日の2日間、長良橋の北側の東岸に設けた水上ステージと倉庫を舞台に、舞踏家、浅井信好のパフォーマンスをはじめ、演奏会、ライブペイント、マーケットが展開された。

なかでも、小栗橋の東に社屋を構える鈴木バイオリン製造株式会社の創業者で「日本のバイオリン王」と称される鈴木政吉氏が手作した名器の演奏会や、政吉氏の三男、鎮一氏考案のススキ・メソードで学ぶ子どもたちによるバイオリンコンサートは、この地域のものづくりを物流で支えた運河の歴史をいまに伝えていた。



「中川運河チャンネルアート」ポスター

運河からアートを発信する未来に向けて

ARToC10 は、1年単位で平成34年まで行われる予定。リンナイ株式会社から10年間の寄附が約束されていることと、10年間をかけて少しずつ運河を取り巻く環境を変えて、再生を図っていこうという展望からだ。

ただし、アートイベントは開催時には人が集まるものの、恒常的に人が集まるわけではない。運河の河岸は港湾関係の用地のため、にぎわいを創出するショップやカフェ、ギャラリーなどの常設は現状では難しい。それについて、「イベントをきっかけに運河に目を向けてもらい、参加した人がまた運河に来たいと思う。単発でも回数を重ねるうちにそういう市民が増えて機運が高まれば一歩前進です。所有者・管理者である名古屋市と名古屋港管理組合にこうした活用方法があることを実感してもらい具体的な反響を伝えていくことが大切。ARToC10 は中川運河への新たな息吹となり、人々の意識を高め、運河をよみがえらせるためのツールなのです」と語るのは同センター調査課の稲野由美子さん。「助成金を出せばアーティストが集まるとは思っていません。将来的にはアートの拠点ができたらいいなと考えています」

欧米では、使われなくなった湾岸倉庫にアーティストが集まり、倉庫をアトリエやスタジオとして活用し、そこから文化・芸術が生まれるという例が少なくない。中川運河に人々が集い、運河からアートが発信される未来に期待したい。

この人と...



劇作家・俳優・劇団名芸代表

くり き ひで あき

栗木 英章さん

地域と寄り添い半世紀… 「継続こそ才能」の実践ぶり。

2012年に創立50周年を迎えた劇団名芸。若い役者の劇団嫌悪や集団の同世代性、短命さなどが話題になっている昨今、半世紀と言うその時間もさることながら、活動の多様さ、「ずいぶん小規模になりまして」と話されつつ現在30名が在籍し、何より18歳から72歳までの世代が共存するその集団性は、他を圧倒している。その代表である栗木英章氏は、座付き作家であり俳優でもある。優しいまなざし、控えめな物腰の奥に潜む、静かな情熱に触れたくて、病後の不寐を承知でお話を伺ってきた。（聞き手：はせひろいち）

かつて稽古場だった呼続のご自宅

今回、取材で伺ったのは名古屋市南区汐田町にある栗木さんのご自宅。ココはまだ劇団が「名芸」と名乗る前、演劇研究会「でくのぼうの会」だった頃、1967年から1980年までの間、「待望の稽古場」として、もしくは「呼続小劇場」として、一時代を築いた活動拠点があった場所でもある。そもそも栗木さんのお母さんが、故夫の遺



建設中の呼続稽古場。見守る劇団員の姿も(1966年頃)

産であった空き地を劇団のために提供し、地元の大工さんに建設を依頼しつつ、自分達も作業に加わって完成させた、いわば「手作りの空間」だった。「活動に賛同してもらった建築業者さんに破格にさせていただいたとはいえ、やはり資金は一番のネックでしたね。皆でカンパに奔走したり、廃品回収に軽トラで回ったり、公演の後でカフェを運営したりして…」と懐かしさに目を細める栗木さん。地鎮祭や祝詞を挙げる神主、その衣装まで全て自作自演だった。そして土地を提供くださった母・栗木たまさんは、劇団50周年を迎える中で他界された。亡くなるまで7～8年の介護を、妻であり名芸の看板女優でもある妻・慶子さんと二人三脚で成し遂げながら、劇団代表として、劇作家としての活動に手を抜くことはなかった。1979年に毎日新聞に連載された栗木さんの記事の中では、こう自ら書かれている。「めっきり老け込んだ母の姿を見るたび、たかが演劇ともいえるその芝居道の、業の深さに、心が果てしなく痛む」と。現在の平針稽古場に活動拠点を移す前年の文章である。

貧しくも潔癖な母親の背中

さらに時代を遡らせていただこう。栗木さんは1942年6月15日、後に呼続稽古場が隣接することになる実家に3人兄弟の次男として生まれた。当時の名古屋市南部、特に生家のあたりは小さな工場や商店街がひしめく、貧しくもひたむきに働く人たちの街だった。「戦時中は軍の工場も多く、僕が子どもの頃にはその傷跡でもある、いわゆる『爆弾池』も残っていて、よく蛙を捕まえたりしてた。あと、近くの山崎川の流木で遊んだりね。とにかく元気な子どもでしたよ」と栗木さん。そして、戦禍から立ち直り、生活を再建させるべく奮起



3歳頃の栗木さん。自宅前にて

している中、栗木さんの父親が病死する。お母さんは女手一つで3人の、まだ小学校に通う子どもを育てるため、裏手の工場に勤め、プレスの機械を回し続けた。「貧しき中にも潔癖さを失わない母でした。姉が金銭的に高校を中退せざるを得なくなった時の母の号泣は忘れられません」と振り返る。そして栗木さん小学6年のとき、一人の教師との運命的な出会いが、栗木さんの人生を大きく舞台芸術に向かわせる。その人こそ、1994年に他界されるまで30年余の名芸代表を務めた演出家・柘植洋氏だった。



3歳の頃 お姉さんと

全ては名物教師との出会いから

名古屋大学を卒業してすぐ働く者の街・南区に赴任した青年柘植教諭は、大胆かつ自由な発想の持ち主で、赴任早々、校庭でフォークダンスを指導するなどして、児童たちの心を驚掴みにする。栗木さんが中学校へ進学すると、彼もまた中学校への赴任となり、演劇部を創設したのだ。「当時の南区は教師が赴任を敬遠するほど

荒れてるイメージだったんですね。それを自ら希望して赴任したのが柘植さんでした。まだ戦後教育の方針に関して誰もが手探りで戸惑っていた時代、いきなりフォークダンスですからね。男女の壁も、教師と生徒の枠すらも持たない『人は平等』を明示する画期的、象徴的なアクションでした」と話す栗木さん。彼に魅せられた栗木さん達は、夜遅くまで学校に居残り、それでも足りない時間は、柘植氏の下宿で、学校の宿直室でと稽古にいそしむ。今では考えられない古き善き教育の懐深い風景である。取り組んでいたのは木下順二の民話劇「三年寝太郎」「夕鶴」。このキャストが栗木さんの他に宇田順一氏と大滝敏彦氏。いずれも名芸の主要メンバーであり今なお現役の劇団員である。文字通り全ての原点がココにあったわけだ。

この頃のかげがえのない青春の記憶は、やがて高校に就職にと分かれた仲間の心に消えることなく棲みつき、誰からともなく演劇部の同窓会的集まりが持たれ、やがてサークル化し、ついに1962年の8月、記念すべき旗揚げ公演となる。「何といても旗揚げからチェーホフですからね。『熊』と『結婚申込』の2本立て。心配だった客席も近所の人や同窓生が400人近く駆けつけてくれて…南部の街に手作りの文化をスタートさせた感慨はひとしおでした」と栗木さん。終演後、おりしも台風の直撃を受け、帰路を失った面々は創立メンバーの下宿で朝まで語り明かす。旗揚げの興奮も手伝って一気にヒートアップ。演劇街道まっしぐらの人生が始まった。



◀名芸の原点
「三年寝太郎」

▼「夕鶴」



三本柱の一角を担う『栗木作品』

ご存知の方も多いだろうが、名芸の活動は大きく分けて3本の柱を持っている。名芸版との愛称まで生まれたシュークスピア作品群と、伊勢湾台風被害で沈みがちだった南部の子ども達を元気付ける目的から発した子ども劇場の取り組み、そして栗木さんが座付き作家として書き下ろす創作演劇だ。「僕自身、映画が大好きな少年だったが、高校生の頃は小説家志望の面もあって、書くという行為には抵抗がなかった」と話す栗木さん。処女作「俺は旋盤工」は南部青年劇場への書き下ろしだったが、これがリアリズム演劇の研究会で取り上げられ、その後「兄と慕う」岐阜のこばやしひろし氏との出会いにも繋がっていく。「その席でこばやしさんは『これ書いた奴、若けりゃ可能性はあるんだがな…』と周囲に喋って、実際会ったら僕が若かったので面食らっていましたね。で、褒められるかと思ったら辛辣な感想が返ってきた」と、振り返る栗木さん。以降、名芸への書き下ろしを中心に120本を越す執筆、上演が続いていく。「その後、こばやしさんとはおつき合いが継続しましたが、やはり厳しい人でした。僕の戯曲では『夜明けの機関車』を唯一褒めてくれたけど、その言葉も『おい、もうこれだけでいいぞ』ってね。あとは役者に賭けろ、と」。ちなみに「夜明けの機関車」は全国誌に戯曲掲載された後、平針の新しい小劇場のこけら落とし公演（1981年）で上演され、その10年後も待望の末、再演されている。

「でくのぼうの会」のほうは、先述の手作りの呼続稽古場を得て、ますます活動の幅を広げ、1970年に皆



で協議を繰り返した結果「名古屋芸術劇場」を名乗ることに決めた。この旗揚げ公演も栗木さん書き下ろしの「ここから」だった。やがていつの間にか略称だった「名芸」が本名になっていく。そして、呼続の稽古場が老朽化、近隣住民への配慮もあって、ついに幕を下ろし、現在の平針小劇場への移転となる。長年通いつめた稽古場に対し開かれた、ささやかなお別れ会、そして解体。平針小劇場誕生の秘話や、この頃から盛んになり始めた他劇団との交流ぶり、市民劇への参加などなど、劇団のヒストリーがそのまま栗木さんの生き様と併走しているわけだが、50年に及ぶ劇団エピソードを全てココで紹介するには無理がある。幸い「名芸50周年史」が2013年に刊行されており、いい意味で温かい手作り感にあふれるこの冊子は、まだ残部が多少劇団に残されているらしい。ぜひとも何かの機会に参照いただきたいと思う。そして、それらを年史に委ねて、ココでは栗木さん本人の生き様に再び注目してみたい。

労働者の立場から書かれる言葉

「地域のため、働く者のため」と言葉で言うのはたやすいコトだが、名芸の説得力は、やはり栗木さんをはじめ、集団の構成員がちゃんと「仕事を持ちつつ芝居も続けていく」と言う信念に貫かれているからに他ならない。家電大手の東芝の正社員として、東芝名古屋工場に技術者として勤務した栗木さん。1998年、早期退職を促す気運に応え56歳で東芝を去るまで、まさに「働きながら芝居を続ける」を実践する38年間だった。「当時の家電開発の部署は実に多忙な環境でして、自分の気持ちの中では両立できているものの、残業が当然の社風の中、本番近くになれば心を鬼にして毎日定時に退社するわけですね。同僚の視線の中、自分だけ更衣室へ向かう廊下は実に長かった」と笑顔で語る栗木さん。「もちろんこっちにも仕事仲間へのすまなさはあって、これに見合うだけの演劇を作らねば、



社内結婚等の司会は30組ほど…業界から「司会屋の栗木」の異名も

と、あえて自分を律する部分もありましたね」。在職中にこんなエピソードもあった。工場移転に伴い内部告発的な騒ぎが起き、かねてより「芝居はア力」のような偏見もあった時代、匿名の内部告発者は栗木さんではないか、という噂が沸いた。その際、直属の上司はこう断言した。「栗木は同じコトをしたとしても匿名なんて卑怯なことは絶対しない。本名でモノを言うのが栗木だ。だから犯人は違う」と。決して仲良しの上司ではなかったが、栗木さんの筋の通し方には一目置いていたのだ。「僕自身は愛社精神ゼロの男だと自負し、何の後ろ髪もなかったつもりだったのに、不思議と退職して当分の間は、やたら東芝の夢ばかり見ていました」と栗木さん。結果、技術開発者として中間管理職までは勤めたものの、その先の出世には関心がなかった。「数字や能力で差別される社会に生きながらも、差別する側にだけはなりたくなかったんです」。栗木作品の根底に流れる労働者、弱者への公平な優しいまなざしは、そのまま栗木さんが実践してきた「生活と芝居」の共存やその距離感から生まれている。先に紹介した新聞の連載記事の中で栗木さんはこう語っている。「地域に根をおろすことは、文字通り恥も外聞もなく、丸ごとその地で続けるところにしかない」と。

継続を促した「個の自由」を守る姿

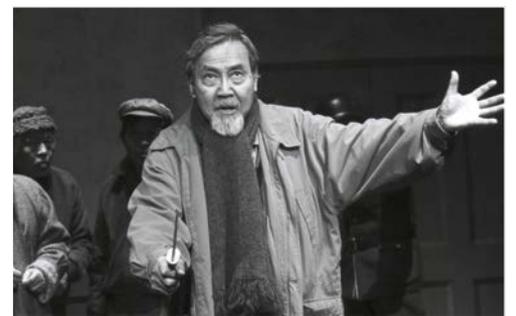
東芝を辞めた栗木さんは、以降、演劇活動に専念し、劇団代表のほか愛知文団連や反核舞台人の集いの代表、天白平和と文化のつどい、文化フォーラム・南などで主要な役職を務められている。成人した2人のお子さんも、それぞれ音楽や舞台の道を選び、上京して頑張っていると聞く。「僕は母親の期待を裏切りつつも、母親との生活から逃れ切れなかった。自分としては納得しています。でも、だからこそ息子や娘の人生に対しては一切の拘束をしたくない。これが僕なりの親の務めだと信じているんです」と栗木さん。父親としての顔と発言は長くは続かない。「そもそも名芸と言う集団は、前代表の柘植さんの持ち味であった『教条的ではない』こと『人って弱いもんだよね、でも平等だよ』って教えが、全てに生かされているんです。決め事は皆で合議をし、「主張独断の活動」を劇団に持ち込まない暗黙のルールがあって、集団として思想・信条の自由は守る。ノルマも一度

も強いたことがない。ある意味アマチュアと言われるかもしれないけど、劇団内に『大先生』がないことで、皆で支えあう姿勢が生まれ、継続を促した。演劇的にもレパートリーの広さに繋がっていると思う。ぜひ次代を担う若手の中から、劇作家、演出家を育てつつ、無理ない名芸流の世代継承をしていきたいですね」と語る。



◀「リア王」を熱演する栗木さん
(2013年天白文化小劇場)

▼「巨匠」では凄みのある老人役
(2014年平針小劇場)



最新作「美ら海」に見る集団の底力

最後に…実は今回、この原稿の締め切りをギリギリ延ばしてもらって、11月下旬に行われた名芸の最新公演「美ら海」を観劇させていただいた。10年前に他劇団へ書き下ろされた栗木さんの戯曲であり「ぜひ自劇団でも」と熱望されていた作品だ。栗木さんをご病気の術後であり、演出を高村真一氏に託しての舞台だったが、受付に立たれていた栗木さんの顔には、安堵と満足感が感じられた。沖縄の基地問題をダイレクトかつ繊細に取り上げつつ、地元名古屋との距離感とその「超えるべき壁」の本質に迫った力作。沖縄を訪れたことのない出演者たちに「せめて雰囲気だけでも」と懇意の沖縄専門居酒屋に皆を誘って行く。「さすがに僕の泡盛はマスターにこっそり20度ぐらいに薄めてもらってましたけどね」と笑う。天白文化小劇場の客席を埋める、決して若くはない観客からの真剣な視線と拍手。そして何より冒頭で触れた「18歳から72歳までの世代が共存する集団」だからこそ成し遂げられた客演に頼らない舞台。「継続による才能」がしっかり受け継がれ、それこそが栗木さんの「人生をかけた功績」である、と実感したのは取材者だけではないと思うのだ。



ミュージカル『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』

名古屋市文化振興事業団では、毎年、地元で活躍する音楽・演劇・舞踊をはじめとする舞台人の総力を結集し、新しい可能性を追求する企画公演を開催しています。

昨年度、事業団30周年とともに30回記念公演を上演し、31回目の新たな挑戦の年を迎える今回は2005年のトニー賞11部門にノミネートされ6部門を受賞した名作ミュージカル『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』（上演台本・訳詞・演出／寺崎秀臣、指揮／小島岳志、振付／小田真砂世）を上演いたします。

名古屋初演となる本作品を、オーディションにより選ばれた出演者と生のオーケストラが、『サウンド・オブ・ミュージック』等作曲し「ミュージカルの王様」と呼ばれたリチャード・ロジャースの孫アダム・ゲッテルが作曲を手がけた美しい音楽にのせてお贈りします。地元舞台人が総力を挙げて創り上げるミュージカル『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』にどうぞご期待ください。

【上演台本・訳詞・演出】

寺崎 秀臣

(てらさき ひでおみ)

広島県出身。'90年東京学芸大学を卒業後、東宝演劇部と契約。'03年名古屋の名鉄ホールにて『お風呂番物語』で演出デビュー。舞台の演出のみならず、ミュージカルの翻訳、訳詞、オリジナル楽曲の作詞も手掛ける。主な演出作品は「屋根の上のヴァイオリン弾き」、「くたばれ! ヤンキース」、「スプリングピー」、「いりどり橋」、「月の輝く夜に」、「ブライド」、「音楽劇 蒼穹のファフナー」、「ハロー・ローリー!」。また、「ミス・サイゴン」では、演出助手として参加。近年は、東宝芸能50周年Musicalチャリティ・コンサート「Espoir〜希望を持って〜」、読売日本交響楽団の演奏による「ミュージカル・ミーツ・シンフォニー」、東急シアターオーヴ製作「フレンチ・ミュージカル・コンサート」など、コンサートの構成・演出も手掛けている。



31年目、新たな挑戦

昨年、名古屋市文化振興事業団は設立30周年を迎えました。その間たゆまずオペラ、ミュージカルの人気作品のみならず、オリジナル作品をも上演し続けてこられた業績は、まさに「素晴らしい」の一言に尽きます。そしてこの度、新たな挑戦の第一歩を踏み出す作品として選ばれたのがこの『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』です。

「ピアッツァ」とはイタリア語で「広場」という意味で、このタイトルからもわかるとおり、この作品はアメリカの女の子がイタリアで出会った男の子と恋に落ちる、オーソドックスなラブ・ストーリーです。とてもパーソナルな作品ですが、登場人物一人ひとりの心のひだをなぞるように音楽が流れ、観客に問いかけるように物語が進み、誰もが抱える「愛」のあり方や「家族」の絆について考えさせられる作品です。

この度キャストを決めるべく行われたオーディションには、オペラ、ミュージカル、演劇ですでに活躍されている方から、今回が初舞台となる方まで本当に多才な人たちが応募くださり、選考に大変苦心しました。結果、5回公演となってからは初の試みとなるダブル・キャストという公演形態を取らせていただくことになりました。このこともまた、新たな挑戦の一つです。キャストによって物語がどう変わるのか、見比べていただくのも今回の楽しみのひとつだと思います。

新たな挑戦の第一歩となる『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』を、是非劇場でご覧ください。お待ちしております!

【指揮】

小島 岳志

(こじま たけし)

'97年愛知県立芸術大学音楽学部器楽科卒業。フルートを故加藤敏、峰岸社一、村田四郎の各氏に師事。大学在学中より指揮活動を始め、名古屋二期会・名古屋オペラ協会・三重オペラ協会・名古屋芸術大学・四日市市民オペラ・三河市民オペラ・名古屋アクターズスクールなど、多数の舞台公演に参加。'10年9月には名古屋市文化振興事業団企画公演ミュージカル「海の向こう」に指揮。ジャパン・ウィンド・アンサンブル、一宮市消防音楽隊の指揮者を歴任。桐朋学園大学にて指揮を黒岩英臣氏に師事。'13年より、同朋高校音楽科非常勤講師。



際立つ音楽の力

前回30周年の記念ガラコンサートでは、音楽スタッフの一員として舞台を作る側に居ながらも、かつて自分も観客の一人だった者として、大きな感慨にとらわれてなりません。この30年の間、どれほど多くの舞台人の情熱や魂が注ぎ込まれ、その精神が受け継がれてきたかを考えると、本番中にもかかわらず涙がこぼれてきたのを思い出します。これぞ芸どころ名古屋を象徴する事業だと痛感したものです。

さて今回の『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』ですが、第31回の新しい門出を飾るに、あまりにも相応しい(?)というが、チャレンジングな作品です。エリザベス・スベンサーの原作『天使達の広場』では、母親マーガレットのモノローグの形で、彼女の思考を中心に描かれており、通常我々が舞台上で期待するような、スペクタクルなシーンや痛快な大団円などは一切ありません。家庭生活に問題を抱えながらも、ごく当たり前の日常、そしてその延長線上の旅先で起こった物語です。

しかしながら、それを舞台化するにあたり、際立っているのがアダム・ゲッテルの音楽の力です。小編成のオーケストラながらもキラキラと泡立つような光の粒、そして押しはく引く波のようにうねりのある音楽の素晴らしさで観客を魅了することでしょう。

我々もこの音楽を通じて、各登場人物とドラマの機微を克明にし、観終わったお客様に「ほっこり」した気分でお帰り頂けるよう専心して参りますので、ぜひ会場に足をお運びください。

【振付】

小田 真砂世

(おだ まさよ)

'83年ジャズダンスを始め、'85年佐々智恵子バレエ団にてクラシックバレエを学ぶ。'89年スタジオM発足。ニューヨークにてルイジ、ミッシェル・アサフ、マックス・ストーンらに師事。'95年ジャズダンスワールドコンGRESS振付コンクールにて準優勝を獲得。'12年【CREO DANCECOMPLEX】(ダンスコンテスト)にて優勝。'03年よりNCA(名古屋コミュニケーションアート専門学校)、'13年よりみずほ短期大学非常勤講師となる。その他、舞台、イベント等多数出演。CM、イベント等の振付も手掛け、ディズニーライブのキッズダンサーを4年連続で輩出。



美しい音楽にのせて

事業団公演の30年という長い歴史の中で、かつて自分もオーディションを受けたことを思い出します。そのうえで、今回事業団公演に振付として参加させていただくことを、感謝すると共に嬉しい気持ちでいっぱいです。

30周年という大きな節目を迎え、新たな挑戦をするべく選んだ作品がこの『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』。この作品は、2007年に東京で一度上演されただけという、日本では決して著名な作品ではないことを知り、様々な媒体でこの作品を勉強させていただきました。

そこで私が思ったことは、音楽の旋律が美しいけれど難解である。また派手なダンスシーンがほとんどない。この2点が振付をする上で、最大の課題になるであろうと思いました。

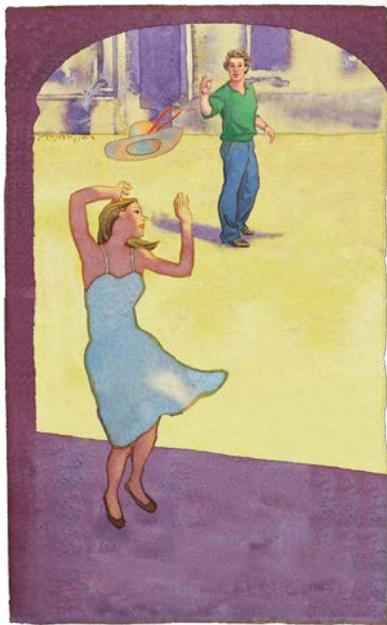
オリジナル作品から参考になる動きがほとんどないため、一から動きや動線の創造を求められます。それは、今回オーディションを経て出演する演者も同じこと。

そんな作品にどう取り組むか…。どうすれば美しい動きに見えるか…。

一流のスタッフ・出演者と共に、様々な可能性を見出し、それぞれの持っている力をフルに生かして、見ごたえのある作品を創り上げたいと思います。美しい音楽と共に、幸せな気分になるような、ミュージカル『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』を、是非劇場でご覧ください!

娘を想う母親の愛情、そして純粋な若者の恋の物語

The Light in the Piazza



日 時／2月20日(金) 18:30
 2月21日(土) 11:00、16:00
 2月22日(日) 11:00、16:00

会 場／名古屋市青少年文化センター・アートピアホール [ナディアパーク11階]

料 金／S席 4,500円(1F)、A席 3,500円(2F) <全指定席>

※事業団友の会会員は1割引 (事業団チケットガイド及び事業団の管理する文化施設での前売りのみ)

上演台本・訳詞・演出／寺崎秀臣 指揮／小島岳志 振付／小田真砂世

管弦楽／セントラル愛知交響楽団 歌唱指導／江端智哉、やまもとかよ

主催／公益財団法人名古屋市文化振興事業団 助成／芸術文化振興基金

<ライト・イン・ザ・ピアッツァ物語>

1953年の夏、アメリカ人の主婦マーガレットはかつて新婚旅行で来たことのあるフィレンツェに娘クララとともに訪れていた。彼女たちが観光スポットを見学していると、クララの帽子が風に巻き上げられ、地元の青年ファブリッツィオの足元に落ちる。偶然だけれど運命的な若い二人の出会い。この瞬間、クララとファブリッツィオは恋に落ちる。

ファブリッツィオの家族も彼の恋を見守り応援しようとするが、クララに対して極端なほど過保護なマーガレットは二人を遠ざけようとする。物語が展開するにつれて、クララの秘密が明らかになっていく。クララの秘密を隠しとおせなくなったとき、マーガレットは娘の将来だけでなく、自分の生き方についても見つめなおさざるを得なくなった— 娘を愛するが故の母の苦悩と解放、そして純粋な若者たちの恋の物語です。

出 演／

2月20日(金) 18:30
 21日(土) 16:00
 22日(日) 11:00



マーガレット
日比野 景



クララ
奥村 育子



ファブリッツィオ
片山 博貴



ナッカレリ氏
岩川 均

2月21日(土) 11:00
 22日(日) 16:00



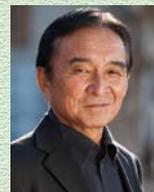
マーガレット
加藤 恵利子



クララ
坂井 苑美



ファブリッツィオ
石川 敦貴



ナッカレリ氏
小澤 寛

両 日



ナッカレリ夫人
山田 紘子



フランカ
趙 知奈



ジュゼッパ
園田 裕史



ロイ
加藤 武志



司祭
宮崎 智永



ナッカレリ夫人
こざわ まりこ



フランカ
鬼頭 愛



ジュゼッパ
市川 太一

<アンサンブル>

愛染 洸一、浅井 健、伊藤 茜、各務 裕梨佳、鎌田 哲、ガラティオート 尚美、北嶋 剣、黒河内 彩、後藤 優子、西塔 理絵、清水 莉緒、瀧石 宗一郎、田村 友香、永田 萌、早川 ともり、堀 拓哉、三島 早稀、山田 幸保、米田 直加 (順不同)

※キャストを都合により一部変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

～ 関連事業のご案内 ～

ミュージカル『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』稽古場見学会

2015年2月の本番直前、ミュージカル『ライト・イン・ザ・ピアッツァ』の上演に向け、スタッフ・キャストが一丸となって、日夜奮闘中! 寒さにも負けず、稽古場では熱気が高まっています。普段見ることのできない、ミュージカルの稽古場を覗いてみませんか?

日 時：1月31日(土)14:00
 会 場：演劇練習館(アクテノン)リハーサル室
 定 員：先着30名(1グループ5名様まで)
 料 金：無料
 申込方法：友の会会員先行受付 1月6日(火)9:00～
 一般受付 1月8日(木)9:00～
 申 込 先：名古屋市文化振興事業団チケットガイド
 TEL 052-249-9387 (平日9:00～17:00)

名古屋市文化振興事業団 主催事業

1月 2月

チケットは、好評発売中です。

名古屋市の文化小劇場を会場としてお届けする公演をお楽しみください。

活動写真弁士 坂本頼光が贈る無声映画の世界

～ロイド・キートン・チャップリン～



日時 1月18日(日) 14:00～

会場 東文化小劇場 TEL 052-719-0430
料金 <全自由席>
一般1,000円 学生800円

ポイント 553-429
20世紀の三大喜劇王・チャップリン&ロイド&キートンの無声映画三作品を一挙上映!坂本頼光の活弁つきで大爆笑間違いなし!
「チャップリンの冒険」(1917年/監督・主演:C.チャップリン/20分)「キートンの警官騒動」(1922年/監督・主演:B.キートン/18分)「ロイドの憂心無用」(1923年/監督:S.テイラー/F.ニューメイヤー・主演:H.ロイド/67分)

※観覧券の入場はご遠慮ください。

加藤恵利子&奥村育子ジョイントコンサート

～MUSEが舞い降りた～



日時 1月28日(水) 14:00～

会場 熱田文化小劇場 TEL 052-682-0222
料金 <全指定席>
一般2,500円 学生2,000円

ポイント 249-250
名古屋で花開いた実力派ソプラノ歌手・加藤恵利子と奥村育子。ふたりが、クラシックだけでなく誰もが耳にしたことのある日本の古き良き歌やミュージカルナンバーなど美しい名曲の数々を、セントラル愛知交響楽団のメンバーとの共演でお贈りします。曲目:「蘇州夜曲」「宵待草」「アヴェ・マリア(カッチーニ)」ほか

※観覧券の入場はご遠慮ください。

ビートルズ・クラシックス・コンサート

～1966カルテット～



日時 2月8日(日) 14:00～

会場 緑文化小劇場 TEL 052-879-6006
料金 <全指定席>
一般2,500円 学生1,800円

ポイント 242-020
クラシック × 洋楽アーティストのカバーで話題の1966カルテットが、緑文化小劇場に登場!!ビートルズなど聴き馴染みのある曲のカバーで人気を集める彼女たちが織りなすハーモニーにご期待ください!!
曲目:「ハイ・ジュード」「レット・イット・ビー」「アビー・ロード・ソナタ」ほか(予定)

※観覧券の入場はご遠慮ください。

TAP DO! ～リズム&コメディ～

タップダンス・エンターテインメントショー



日時 2月14日(土) 14:00～

会場 西文化小劇場 TEL 052-523-0080
料金 <全指定席>
2,000円

ポイント 439-966
音楽とリズム、そして誰もが共感できるユーモア、上質なエンターテインメントを追求すべく、2002年に発足されたエンターテインメント集団・TAP DO! 2008年「英国エジンバラ・フリンジ・フェスティバル」にて、日本の団体で最高の四つ星を獲得するなど、そのパフォーマンスは日本のみならず、世界中から支持されている。

※観覧券もご購入できます。3歳以上有料。ただし、3歳未満のお子様もお席が必要な場合は有料。

●名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387 (平日9:00～17:00/郵送可)

※名古屋市文化振興事業団友の会会員は1割引き(学生料金は割引対象外) (事業団チケットガイドと事業団が管理する文化施設窓口での前売り扱いのみ)
※市内13文化小劇場、市民会館、芸術創造センター、青少年文化センター、名古屋能楽堂ほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。

●チケットぴあ TEL 0570-02-9999

※サカルク・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。チケットぴあでは手数料等が必要になります。

- ・愛知芸術文化センタープレイガイド TEL 052-972-0430
 - ・ヤマハミュージックリテイリング名古屋店 TEL 052-201-5152
- ※「ビートルズ・クラシックス・コンサート～1966カルテット～」のみ愛知芸術文化センタープレイガイド、ヤマハミュージックリテイリング名古屋店でもお求めいただけます。

チケット
取扱い

主催 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団

公演に関するお問い合わせは事業団チケットガイドまで

一味違う印刷をお探しのあなた!
箔印刷は押してましたが、今は
箔がつつくんです!!
(コールドフォイル印刷)

鬼頭印刷株式会社

Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
data@kito-net.com www.kito-net.com
〒456-0073 名古屋市中区栄三丁目18番1号

- コールドフォイル印刷
- フォログラム転写印刷
- UVオフセット印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- オフセット印刷
- Mac、Win、DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

We make you move

舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909